

常時上位成績のクラブが翌シーズンに順位を大幅急落した要因に関する研究

トップスポーツマネジメントコース

5017A070-9 吉鹿 奈三子

研究指導員 平田 竹男 教授

1. 研究の背景

J リーグは 1993 年に開幕して以来、1999 年に J2、2014 年に J3 が創設され、25 周年を迎えた 2018 年度には、J1、J2、J3 合計で 57 クラブが属するプロサッカーリーグである。J リーグクラブは、リーグレギュラーシーズンに加え、天皇杯、J リーグカップ（旧ヤマザキナビスコカップ）、アジアチャンピオンズリーグ（以下、ACL）等、リーグレギュラーシーズン以外にも試合があり、J1 所属クラブの最低試合数は 41 試合を行う。特筆すべき点は、前年シーズン成績と次年シーズン成績の 2 年間において、最終成績が 7 位以上の急落を経験したクラブが 28 件、存在していたことである。例えば、ACL 優勝、FCWC で第 3 位となったガンバ大阪は 2011 年に第 3 位であったのが、翌シーズン 2012 年には 17 位に急落している。

J リーグは、開幕時は 10 クラブでスタートし、昇降格のないリーグであり、シーズン優勝の決定方式もリーグの前期と後期でチャンピオンを決定し、レギュラーシーズン後に優勝クラブ決定戦を行っていた。1999 年に J2 が創立したことで、2 部構成となり、昇降格システムが導入された。2005 年に前後期性が無くなり、通年でのシーズン優勝を決める決定することになっている。したがって、アメリカ型リーグからヨーロッパ型リーグ構造へ移行している。ヨーロッパのサッカーリーグ同様に、J リーグクラブでも上位の成績を残すことで入場料収入やスポンサー収入の向上をすることができるのである。

先行研究より、日本におけるサッカーや J リーグの研究は多数見られ、ユースに関する研究では兼清（2012）、三澤（2013）、藤井（2016）、J リーグの観戦需要の研究では河合（2008）、畔蒜（2012）、山本（2015）がある。また、J リーグクラブの成績と選手年俸について内田（2008）がある。しかしながら、常時上位成績のクラブが翌シーズンに順位を大幅急落した要因に言及した研究は見当たらない。

2. 研究の目的

本研究では、常時上位成績のクラブが翌シーズンに順位を大幅急落した要因を明らかにすることを目的とする。

3. 研究方法

J1 リーグ上位 4 クラブにおいて、2 年以上連続で 4 位以上の成績を残しているクラブ 11 クラブのうち、本研究で定義する「急落」（翌シーズンの成績順位が 6 位以上下降）した 4 クラブを対象とする。

- ・サンフレッチェ広島：2012 年 1 位、2013 年 1 位⇒2014 年 8 位

- ・ガンバ大阪：①2013 年 1 位、2014 年 2 位、2016 年 4 位⇒2017 年 10 位、②2009 年 3 位、2010 年 2 位、2011 年 3 位⇒2012 年 17 位

- ・横浜 F マリノス：2002 年 2 位、2003 年 1 位、2004 年 1 位⇒2005 年 9 位

- ・ベガルタ仙台：2011 年 4 位、2012 年 2 位⇒2013 年 13 位

4. 研究結果

サンフレッチェ広島 14 年

ACL ラウンド 16 に進出した。ACL8 試合直後の J リーグの試合を見ると、直前の ACL の試合に出た選手と、直後の J リーグ試合のスターティングメンバーが 10 人(11 人中)と重複していることから、特定の選手に負担が集中していることがわかる。また、主力選手である青山敏弘選手は ACL に加え日本代表にも選出されており、ブラジル W 杯後に怪我のため 1 か月以上負傷離脱していた。

ガンバ大阪 17 年

主力選手である藤本淳吾選手、ファビオ選手、金正也選手、今野泰幸選手、アデミウソン選手が負傷離脱していた。また、DF の主力選手であるファビオ選手、金正也選手、丹羽大輝選手が移籍し、CB が 3 人いなくなったことで、守備が崩壊した。

ガンバ大阪 12 年

ACL6 試合直後の J リーグの試合を見ると、直前の ACL の試合に出た選手と、直後の J リーグ試合のスターティングメンバーが 10 人(11 人中)と重複していることから、特定の選手に負担が集中していることがわかる。

特に日本代表に選出された遠藤選手は J リーグ 34 試合、ACL4 試合、今野選手が J リーグ 33 試合、ACL5 試合に出場していることから、2 選手の負担が大きいことがわかる。また、主力選手が 5 人移籍したことで得点力が落ちたと考えられる。また、10 年目の西野監督からセホーン監督への交代、さらに 4 節からは松波監督へ交代していることから、シーズン前のチーム作りがうまくいかなかったと考えられる。

ベガルタ仙台 13 年

ACL6 試合直後の J リーグの試合を見ると、直前の ACL の試合に出た選手と、直後の J リーグ試合のスターティングメンバーが 10 人(11 人中)と重複していることから、特定の選手に負担が集中していることがわかる。クラブ内得点王であった赤嶺真吾選手が不調であったこと、赤嶺選手に代わる二桁得点の選手を補強できなかったことが急落要因であると考えられる。

横浜 F・マリノス 05 年

ACL6 試合直後の J リーグの試合を見ると、直前の ACL の試合に出た選手と、直後の J リーグ試合のスターティングメンバーが 10 人(11 人中)と重複していることから、特定の選手に負担が集中していることがわかる。また、12 得点していた安貞桓選手のシーズン中の退団、10 得点の坂田大輔選手の負傷、10 得点の奥大介選手の不調があり、3 選手に代わる二桁得点の選手を補強できなかったことが急落要因であると考えられる。

5. 考察

急落する要因

クラブの結果を踏まえ、表 1 にある通り、急落の要因は疲労、怪我、放出、補強ミス、監督交代の 5 つであると考えられる。

要因は疲労、怪我、放出、補強ミス、監督交代の 5 つ、いずれのケースでも 2 個以上が同時にあり、この 5 項目が急落する要因として考えられる。4 チーム、5 事例で急落した時の出来事を分析すると、5 事例中 4 事例は ACL に出場していた、5 事例中 3 事例では主力選手が怪我をしていて、5 事例中 4 事例では主力選手が退団し、5 事例中 2 事例ではあるポジションでの退団、入団の選手数に差が生じるという選手補強のミスが見られ、1 事例は監督の交代があった。

表 1 要因のまとめ

	疲労	怪我	放出	補強	監督
広島 14 年	○	○			
G 大阪 17 年		○	○	○	
G 大阪 12 年	○		○	○	○
仙台 13 年	○	○	○	○	
横浜 FM05 年	○		○	○	

急落後の糸口

急落した 5 事例のうち、急落により J2 落ちし、翌年シーズン J2 1 位、そして、J1 復帰の年にリーグ制覇したガンバ大阪の事例は急落後の回復への足がかりを得るために、非常に興味深いケースである。11 年 3 位⇒12 年 17 位の要因は疲労、放出、監督であり、リーグワースト 2 位の失点数であった。そこで、14 年に GK 東口順昭選手、D F 岩下敬輔選手、米倉恒貴選手を獲得し、D F であった今野泰幸選手をセンターハーフにすることで、守備を固めた。12 年 65 失点から 14 年 31 失点になっていることから、補強選手の守備への貢献が高いことが J1 リーグ優勝に繋がり、戦略的な選手獲得ができれば、急落しても早期に上位に復活できる可能性があるといえる。

研究の限界

本研究では、急落要因を分析するため、対象クラブの選手出場時間や出場回数、移籍情報等から研究を行った。したがって、シーズン中の成績不振による監督交代のクラブ方針などは研究できていない。また、疲労度に関しても選手が試合間でのフィジカルケアをどのようを行っているかを調査できていないため、本研究の限界とする。

6. 結論

上位成績クラブが翌シーズンに順位を大幅急落した要因には、ACL 出場によって生じる過密日程による主力選手の疲労、主力選手の怪我、主力選手の放出、選手補強のミス、監督の交代の 5 要因があり、なかでも選手補強のミスが重要な要因となることがわかった。ガンバ大阪では、課題であったポジションのバランスがとれたチーム編成を克服するために、DF の選手補強を行ったことで、再び上位成績を残すことができた。